

子宮頸がんワクチン

対応丸投げに不満の声

16才「判断難しい」「一時中止を」

「患者に説明する情報がない」。厚生労働省が子宮頸がんワクチン接種の呼び掛けを中止したのを受け、医療現場には十五日、戸惑いが広がった。副作用問題をめぐり「対応を現場に丸投げしている」と不満の声も出た。

月二十人程度の接種希望者がいるというさ
いたま市岩槻区の峯小
児科では、峯真人院長
か「『接種してもいい
か勧めない』というの
は医師にとっても、接
種を受ける子どもや保
護者にとっても判断が
難しい。情報が少な
く、どう対応すればい
いのか」と疑問を呈し
た。

積極的には接種を勧
めないが、原則無料で
受けられる定期接種の
位置付けは変えない
。厚生省の対応につ
いて「非常に分かりに
くい。安全性を確認す
るなら接種自体をいつ
たん止めるべきだ」と
話すのは、神奈川県内
の病院の小児科医。

「国が勧めないのに現場の医師として勧めるわけにはいかない」として、希望者には別の医療機関を紹介する意向だ。

東京都荒川区の六十代の小児科医は「リスクの説明を尽くした上で、希望者にはこれまで通り接種する」との姿勢。副作用の説明書を独自に作って院内に

置いているが「今後の接種希望者は激減するだろう」とみる。

「的に情報を集めなければ」と話した。

埼玉県内の総合病院の男性職員(四七)は「まだ自治体から連絡はなく、病院として対応は決まっていない」と戸惑う一方、「接種の責任や判断を現場に丸投げされた印象だ」と語った。

保護者にも波紋は広がっている。小学三年の娘三人を持つ前橋市の主婦小椋真希子さん(三三)は「子どもに接種させるかどうか保護者の責任が重くなる。情報が少ないまま接種を受けさせるのは不安。親としても積極